

## 質問紙法に関する基礎的研究

— は し が き —

近 藤 貞 次

質問紙法は、人間行動研究の基本的な方法の一つとして、諸学問の分野で用いられており、その利用度は一層高くなっていくものと考えられる。しかしながら、現段階では、それを構成する質問項目および項目群の信頼性、妥当性、判別性ならびに測定結果に基づく行動の予測性が必ずしも満足すべき水準にあるといわれないことが問題点として指摘される。その問題点生起の原因の一つとして、「調査者と被調査者との間の質問項目に対する意味のとり方の相違」ということが指摘される。すなわち、調査者の発する質問が、調査者の意図する通りに被調査者に受けとられているかどうかの問題である。この問題は、質問紙法を使用する場合に是非検討しておかねばならない問題である。幸いこの問題の研究に対し昭和40年度文部省総合科学研究費を受けることができたので、多くの共同研究者の協力を得て、研究に着手することにした。このようにして研究を始めて見ると、共同研究者はそれぞれ特殊の研究興味を持っており、それに応じて幾つかの研究班が組織されることになった。言うまでもなく、研究というものは研究者が意欲をかたむけて研究に当るのでなければよい研究成果はこれを期待することができない。そこで、目ざす方向が質問紙法の基礎的研究に連っている限り、幾つかの研究班が組織されるという行き方も一つの行き方であると考えた次第である。組織された研究班とそれぞれの研究班の研究テーマとは次のとおりである。

### A班

研究題目 質問紙法に関する基礎的研究——児童・生徒の人格表現的語彙の理解に関する基礎資料——

研究員 近藤貞次、続 有恒、大西誠一郎、久世敏雄、増田末雄、木村捨雄、長田雅喜、富安芳和、織田揮準、酒井亮爾、堀 紀子

研究概要 この班は、被験者の語彙、項目に対する意味づけの問題を分担課題とした。その主なねらいは、児童・生徒の人格表現的語彙に対する具体的意味づけの実態、人格表現的語彙の理解に関するいわば基礎資料の収集にある。

### B班

研究題目 質問紙調査法と観察法との基礎的な比較研究

研究員 続 有恒、塩田芳久、秦 安雄、鈴木康平、三輪弘道、名倉敬子

研究概要 この班は、質問紙法のもつ基本的な性格を明らかにするために、まず観察法との比較研究をとりあげた。すなわち、学校内外における児童の生活実態を観察法によってとらえた結果と質問紙法によって調査した結果を比較検討することにした。

### C班

研究題目 質問紙法に関する基礎的研究——心理学的臨床の分野における性格表現用語の検討——

研究員 続 有恒、丸井文男、村瀬隆二、村上英治、水上進吾、荻野 惺

研究概要 この班は、心理学的臨床の分野で、実際に用いられている性格表現用語をとりあげ、全国のクリニカル・サイコジストを対象に、それら語彙についての共通性の検討を行なうことをねらいとした。結果としては、(1)とりあげた100語のうち、意味限定のはっきりした、共通性の高い語は38語であり、(2)その38語は他の語彙に比して「行動的・記述的レベル」のものであり、(3)語彙理解の機関差はほとんど見られず、(4)分類に用いたカテゴリー自体の位置づけが問題であることが分った。

### D班（愛知教育大学班）

研究題目 道徳性判定における質問紙法の基礎的研究

研究員 森田 清、相川高雄、沢田秀一、堀内 敏、岩井勇児、高橋丈司

研究概要 この班は、各種道徳性検査の検査間の比較を、ゲス・フリー検査や教師評定をもとにして行なった。研究結果によると、同一下位検査名であっても検査間の相関は低く、他者評定と検査との相関もかなり低いことが分ったので、その要因を探究するために、項目内容、質問形式、教師評定の観点などについて検討した。

（なお、愛知教育大学班の研究成果は、愛知教育大学研究報告 第15輯（社会科学）1967年3月発行、に発表される。）